

蛇紋岩にふとん掛けて（六）

観賞用の「水石」かつ、その種類が「蛇紋岩」と思われる岩石が突然、自宅に出現して二度目の桜の季節を越した。

相変わらず、その岩は、リビングとダイニングの間に鎮座している。

その存在が、邪魔なのかどうか、もうわからなくなって、家の中の一つの風景か、初めからある構造物の一部なのか、無意識の中の一つの要素となっている。

つまり、もう「誰が運んできたのか」、「どのようにして運ばれてきたのか」、「ここに何の理由で置かれたのか」・・・の疑問は異次元の空間へ葬り去られた。

また、「邪魔だから、どこかへ投棄」や、そもそも「邪魔だ」という思いも消えてしまったようだ。

よもたん（飼い猫）、さっきから「猫の額ほど」の額をしきりに岩に擦りつけている。しかも、なんと喉をゴロゴロ鳴らしながらだ。

以前は、よく、よもたん自身から、こちらに近寄ってきて、顎のエラの下を掻いてあげると、けたたましい爆音の”ゴロゴロ”を鳴らしていたが、最近は、呼ばないと来ないし来ても、社交辞令的に甘えたフリをして、サッサと離れていくようになっている。

飼い主としては、季節が大分温かくなってきたからだ、と思っているが定かではない。

「飼い主」はこちら側の言い分であろうが、よもたんからすれば、お世話係。よく言えばとても気の利く使用人。こき使われるドレイに近いのかもしれない。

しかし、こき使われる立場でありながら、こき使われている感じは、全くしないし、むしろ、「癒されている」と恩義（ありがたさ）を感じている。

だから、よもたんに対して「飼ってやってる」なんて絶対言えないし、飼い主の威厳を保つ意味で「飼わせていただいている」や「お世話させていただいている」が落しどころなのかもしれない。「よもたん。いてくれてありがとう」がホントなのだ。

それにしても、よもたんのその岩へのスリスリ具合は尋常じゃない。飼い主が見ていない時なら、まだしも、飼い主の目の前でやられると、あてつけがましいし、なんだか、妙な嫉妬心はその”岩”に沸いてくる。日頃の”お世話具合”が足りないのか、エサならぬお食事の内容がお気に召さないのか。もう少しこっちにもスリスリして欲しい。

そんなとても平凡で退屈な毎日であるが、”よもたん”とその”岩”のお陰で、癒されている心境が、申し訳ないと思いつつ続いている。それが”幸福”というものなのか。

「ありがとう」と、初めて、意識して、感謝の気持ちを以って、その岩に触れてみた。温かい。温い。頬ずりしてみた。よもたんの匂いがした。